

社員の皆様と面談している中で、「評価」という言葉を耳にすることがあります。想像するに、仕事の内容によって会社から評価を受け、それが給与に反映されてくるということなのかと思います。皆様が大変厳しい世界にいらっしゃることに驚きを持っています。私たち医者の世界でももちろん「評価」はありますが、こちらは謂わば前時代的な評価法を用いています。何となく「あいつは性格が悪いよ」とか、「彼女は頼りになるね」などのように、横丁の井戸端会議で為されるような人物評価なのです。例えば、受け持ち患者の病状が悪化したとしても、病気のことですから致し方ないことで、それで主治医の評価が落ちることは通常はありません。医療に比べると、皆様の仕事は結果で評価しやすく、またされやすい分野なのかもしれません。

元禄時代に書かれた『葉隠（はがくれ）』は、武士の気概を伝える書物として有名です。佐賀鍋島藩藩主の侍臣だった山本常朝（つねとも）は、主君がお亡くなりになってどう行動するか悩みました。その時代、主君に追従する殉死が既に禁止されていたため、彼は悩んだ末に人里離れた地にひとり隠棲したと言われています。身を隠して十年の時が経過したとき、田代陣基（つらもと）なる者が常朝を訪ね、向こう七年に渡って常朝の口述筆記を行い、それをまとめたのが『葉隠』です。常朝は十年の歳月を経て、なお鍋島藩士の気概を維持し続けていました。人知れずひっそりとした生活の中で、心の中には燃えさかる炎のような信念を保ち続けていたのです。岩波文庫版のはしがきには、「どこを切っても鮮血がほとぼしるような本」と表現されています。時に穏やかでない表現も見られるため、危険な書との印象が持たれたこともあったようです。しかしその思想の賛否は別にして、常朝は自ら表舞台を去って蟄居し、なお己れを維持し続けたという点で、晩年の鴨長明や宮本武蔵とは異なるように思えます。隠棲生活が十年にも及べば、恐らく常朝は時代から忘れ去られた存在だったことでしょう。しかし彼の生き様は三百年の時を経て、生に対するひとつの考え方を提示し、われわれに勇気を与えてくれているように思います。

「朋有り、遠方より来る、亦た楽しからずや（岩波文庫版）。有名な言葉ですが、私はそれに続く次の言葉を心に刻んで

います。「人知らずして慍（うら）みず、亦た君子ならずや（同）」。

『論語』の中には二度も出てくる言葉です。自分がヒトから理解されなくとも、恨んだり憤ったりするものではないという主旨です。このような記載があるという事実は、『論語』が編纂された紀元前の時代から、満足な評価が為されない場面が日常茶飯事だったことを意味しています。悔しいけれど、正当に評価されないのはいつの時代にも珍しいことではないのでしょうか。むしろ



評価されない中でどのように自分を維持していくのか、その点を私たちは先人に学んでいかなければならないと考えます。生き方に清廉潔白な輝きがあるならば、必ず評価されるときが来ると信じるからです。元禄の世は、常朝の生き方を評価しなかったかもしれません。しかし、少なくともひとりだけ、田代陣基だけはそれを評価し、後世に残すべき価値を見出していました。陣基から生じた小さなバトンは、『葉隠』を通して私達あるいは次世代へと受け継がれ、常朝の生き様は今後とも自信を失いかけた多くの人々を奮い立たせていくことになると思います。

冒頭に指摘した医者の世界における人物の評価法は、全く主観的な基準に則っており、社会の中で活用するには無理があります。しかし人間を見る上で、これほど「疎にして漏らさない」正確な評価法はないとも思います。この主観的な評価に馴染んでいる私には、客観的な尺度である仕事の出来不出来が、単純に時の運に左右されるもののように映ります。どれ程の才能を以ってしても、時局の流れ等に逆らうのは容易ではありません。向かい風の時期に当たれば、誰が担当しても結果は期待値までは至らないことでしょう。したがって結果だけに基づく評価法では、人物そのものの評価が抜け落ちてしまう場合があるかと思うのです。それよりも私が注視したいのは、先に示した評価されていない時のその人の生き様です。その生き様は、紛れもなくその人物そのものを詳らかに現すからです。仕事上で評価されていないと悩んでいる方は、それこそ人間自体が試されている絶好のチャンスと捉えて、曙光がさしてくるその日まで、いばらの道を胸を張って進んで頂きたいと願うのです。